
安心王道転生記(仮)

ララ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

安心王道転生記（仮）

【Nコード】

N1533Y

【作者名】

ララ

【あらすじ】

天使に異世界転生させられてしまう24歳女の話。
王道まっしぐらな安心？設定。

題名は仮名です。変わるおそれがあります。

消滅（前書き）

プロローグ

消滅

自分は結構運がいい方だと思っていたが、案外そうでもないらしい。

「もう一度言ってくれる？」

鈴菜の前にはいるのは、プラチナブロンドの自称天使。外見性別女。外見年齢20歳前後。

「先ほど説明した通り、鈴菜さん貴方には消えていただきます」

自室に突然現れて抹殺宣言。悪魔も裸足で逃げだすに違いない。いくら申し訳なさそうな顔をされても困る。

「断固拒否」

「は出来ませんよ」

チツ。心で舌打ち。

天使いわく、自分は1ヶ月前に25歳にして早くも事故死の予定だったらしい。天界のミスが発覚し、このまま放っておくと他者の運命まで変えてしまう危険な存在なので消えて貰うことになったとか。

「なるほど、夢ね」

「夢ではありません」

「とりあえず起きたいので貴方こそ消えて頂けます？」

「だから夢ではありません」

優しくない天使様だ。甘い外見に騙された気分。現実の酷しさで眼鏡の奥の瞳が潤んだ。

もちろん怒りで。

「そっちのミスなのに随分勝手な話じゃないの」

「……決定事項です」

天使様一瞬動揺。が、仕方ないのだと見つめられる。

「突然消されて皆に心配かけて。警察沙汰になってやれ駆け落ちだなどと要らぬ噂をかけられたりしろと？冗談じゃない」

「いいえ。鈴菜さんが消えた時点でこの世界の歪みは修正されます」

「歪み……」

「起きたことを消すということは我々には容易です。基本禁じられていますが、時と場合によっては行使されます。しかし事故という起きなかったことを……その後を再現することは不可能。よって必然的に鈴菜さんの存在事態が元から無かった世界へと修正されます。

簡単に言つと、有から無は作り出せるが無から作り出されるのは無だけと言つことです」

つまりは私がこの天使に消された瞬間、親からも友人からも全ての知り合いから忘れ去られるということだろうか。

この部屋も私のものではなくなり、私という存在がいた形跡が一切無くなる。

「な、んで」

渴いて張り付く喉から言葉にならない悲鳴が出た。

天使は辛そうに一度目を閉じると、右手をそつと上げ白く発光しだした指をこちらへと伸ばしてきた。ごめんなさい、と呟き伸ばされた手が前髪に触れる。

逃げだしたいのに体が動かない。

「や、め」

とん、と指先が額に触れた。

——ああ、まだやりたいことが沢山あったのに。

自分の体が淡く光出す。消滅しようとしていることを本能的に悟った。

——消えたくない。

親の顔、友人達の顔、過去の恋人を思い浮かべる。

——死にたくない。

だが、どうせ死ぬ運命だったのならだれも悲しませないことは良かったのかもしれない。

一粒流れた涙が落下していく。

想いの詰まった涙が床に落ちた瞬間、“私”という存在はこの世界から消えて無くなった。

幼少編 1（前書き）

——そして違う世界で第二の人生が始まった。

幼少編 1

「あのクソ天使め」

グサツとスプーンで刺したブロッコリーもどきがお皿の上で転がる。

「説明不足！」

お次は柔らかく茹でられた人参もどきが潰れた。

食べ物を取りの矛先にするなど、前世では決してやらなかったが今だけは勘弁して欲しい。

思考タイムに入る度に込み上げてくる怒りの大きさからして、いつそ椅子でも投げ飛ばしてやりたいのだが生憎そうはいかない。久しぶりに手に入れた一人の時間を誰にも邪魔されずに有意義に怒り狂う為の苦肉の策だ。

「坊っちゃま？」

カチリと扉が開く。入室したメイドが近づきながら声をかけてきた。扉が開くと同時に咄嗟に表情を変えたが食事を睨んでいたのを見られたらしい。

「んー」

握りしめたスプーンでつぶれた人参もどきをわざと不器用にすくいをぱくり。うん、リンゴに似た味。

ゆっくりと咀嚼しつつ、「あー」とか言いながらブロッコリ

―もどきも不器用にすくう。

暫く見つめていたメイドも、鈴菜による涙ぐましい努力で作られたいつもの食事風景に安心したのか微笑むと傍に控えた。

今メイドからは子供用の椅子にちよこんと座り、半固形状の幼児食を頑張って一人で食べるこの館の一人息子が見えているだろう。

そう、息子。

男の子

男！

せっかく生まれ変わったのに前世の記憶が残っているせいで中身と入れ物がちぐはぐ。将来の事を思うと今から胃が痛かったりする。

それもこれも、天使のあの一言から始まった。

自分の体が消滅してああ、終わったなと感傷に浸っていた。何だか暖かくてふわふわして眠くて、思考もうまく働かない中、脳内に直接語られた言葉がある。

――幾つか融通は効かせておきました。どうかお幸せに――

ちよつと待つて。融通とは何なのか。お幸せにつて私はもう死んだはず。いったに何が……。

色々聞きたいことはあったが、すでに体も無くたぶん魂だけの存在だった私は何一つ言葉に出来ない。

さらに押し寄せてくる睡魔の波に抗いきれず深い眠り入った。
で、目覚めたら不思議な音がする狭く暖かい場所にいて何処だ
ろここ、とか思ったが不思議と安心出来る場所だったのでもう一度
寝た。

その後も度々起きることはあったが、出来ることは壁を軽く蹴
つてみたりするだけ。

思考が鈍くただ安全だから大丈夫だろうと直ぐに眠りについた。
今思うとそれが母親のお腹にいた時だったのだろう。

その後はまあ、出てくるときに死ぬかと思った。頭が潰れたか
と思ったが無事だったらしい。

目を瞑ったまま呆然としていたら逆さにされて背中を容赦なく
張り手された。

——痛い！

と、私の悲鳴は言葉としてではなく泣き声として口から出た。
それが産声となり歓喜した父親と母親にキスされた時点で何故
か記憶を持ったまま生まれ変わったのだと気付いた。

そこからまあ、必死の情報収集だ。

1歳まではろくな成果は無かった。難しく考えようとしら途端
に眠くなるのだから仕方ない。脳がまだ未発達なせいだろうと諦め
る。ついでに母乳を飲まされるのも恥ずかしいが乳児の勤めだと諦
めた。

ただ、言葉を既に理解できることは助かった。多分天使の融通
の一つだろう。

解ったことは、自分が男に生まれ変わったことと、でかいお屋
敷に棲んでおり貴族的な家柄の長男として生まれたこと。

母の愛称がマリー、父がジル。そして自分はギル。

そして日本では無いこと。じゃあ何語を話てるんだと言われたらそれは解らない。解らないが大体は理解出来る。不思議だ。

あと父親も母親も若く物凄く美形だ。

母親は細身に色白の淡い茶髪をカールさせた綺麗系美人。緑がかった目が宝石みたいで見とれてしまう。なかなか自慢の母親だろう。美人薄命の文字がピッタリで少し不安になるが。

父親はなかなか筋肉が付いていて元日本人の感覚からしたら引きがちかもしれないが、ダンディなおじ様と考えるともしっくりくる。金髪で青い目。屋敷に帰ってきた時は大概腰に剣を提げていて引き締まった体を見ていと妙な色気があり脳内鼻血が出るほどかっこいい。

この分だと自分の外形も恵まれたものになってそうだと予想出来る。

やれ天使のようだと両親やメイドからちやほやされるので間違いないだろう。“天使”と言われる度に不機嫌になり不思議がられたが。

なんやかんやと甘やかされ育ち、母乳から流動食へと代わりだした頃にまさかと思っていたことが決定的になった。

どうもこの世界は日本どころか地球でも無いらしい。

出てくる地名はどれも初めて聞く名前、魔術が普通に使われていたりする。

夜はふわふわした丸い明かりが天井から部屋を照らす。消すときも自動で消したように見えるのでやけに不思議な照明だと思っていたが魔術だったらいい。

魔術が発達した分、科学技術などは地球より遅れをとっている感じた。車変わりに馬だし。

じゃあ自分も将来魔法を使えたりするのかと胸をときめかした。

幼少編 2（前書き）

あれだけ時間かけて7分とかorz

もっと早く適切な文章を書けるようになりたいものです……。

評価&p:お気に入り小説登録ありがとうございます。

まさかしていただけるとは思っていなかったので嬉しさと恐怖でドキしました（笑

亀更新ですが、宜しくお願い致します（ゝ、*）

幼少編 2

ミルクだけではなく流動食も食べ始め、ハイハイも出来始めてから（早かったらしく驚かれた）ある計画を実行した。

メイドさんがスプーンで掬って差し出してくるご飯を断固拒否！

自分で食べます！の意識表示だ。正直、中身25歳、「あーん」状態は恥ずかしかった。

あの手この手で食べさそうとする魔の手から「んー」「やー」と逃れ、スプーンを奪い取り自分で食べる。

「坊っちゃんお願いします」

とまだ若いメイドさんに目をうるうるされて挫けそうになったがそこは心を鬼にしてやっぱり拒否。

何度か繰り返すとメイドさんも諦めそばに控えるだけになった。

勝った！

おしめ交換は涙を飲んで諦めたが。

自由に動ける実感を噛みしめハイハイしまくったので早めに腕も鍛えられた。

じゃあ足も、と支えありで立ち上がったから見事に立てた。

自分で感動する前に周囲が大興奮。両親に今すぐ伝えましょと頭を撫でられ少し照れたのは記憶に新しい。

歩き出したらバランスが難しくすぐ転けたが。

要練習ってことだろう。

とにかく暇すぎて、誰かいる間は寝たり歩く練習をしたり。誰もいない間はテンション高く好きなことをしたり天使の悪口をぶつぶつ呟いたりしていた。

夜寝てる間も誰かしら控えているのが昼寝の時間に少しだけ一人になることがある。

シーツを足で蹴りながらリズムを取り、1人カラオケに勤しんでいたらメイドさんに見られた。しまった。夢中になりすぎた。

目が点ってこういうことをいうんだな、て顔をして扉を開いたまま固まっている。

すぐに適当な言葉でぶーぶー言ってご機嫌さを出し誤魔化してみたが未だに疑った目を向けてくることがある。

平穩に暮らすためには自重も大切に。

そんな感じで、天使への怒りと諦めを感じながら自分なりにうまく過ごして来たつもりだったが、普通の子供とは一線を越えているとという噂は屋敷中に広まっていつている。

泣かなすぎ。

反抗が少なすぎ。

言葉に反応しすぎ。

とまあ、少しずつ普通とは違うと認識され若干引かれてしまった。中には目があっただけで固まるメイドさんも。

話しかけるのだけはあんなに我慢したのに泣ける話だ。

そりゃあ泣かないで寝てるか考え事をしている赤ん坊なんて気持ち悪いだけだろう。

お腹空いた時やおしめを変えて欲しい時だけ目を合わせていたのも明らか失敗だった。

自分で考えてもそんな幼児気持ち悪い。

その頃から、屋敷の者に「坊っちゃん」から「ギルフォード様」と呼ばれるようになった。

正直様付けは未だに慣れないが、これからギルフォードとして生きていくなら仕方がない。

いくら持ち上げられようが高飛車にならないよう気を付けようと受け入れる。

そんなギルフォードを見てにこにこ誇らしげに微笑むメイド。

アルフォンス家の嫡男ギルフォードの神童としての噂は本人の想像以上に広く素早く屋敷外にも拡がっていった。

もちろん本人は知るよしもない。

赤ん坊が使用するには広すぎる部屋の中、高級ベッドの上で鈴菜ことギルフォードは寝ていた。

「旦那様と奥方様共に早く帰って来て欲しいですね、ギルフォード様」

メイドさんがしんみり呟く。

実は半年ほど両親の姿を見ていない。ギルフォードの面倒は全てメイドさん達がしてくれている。

両親は半年前にキスの嵐という熱烈なお別れをしてどこかに旅立った。

よく解らないが、貴族には大切な仕事があるのだろう。

「出来るだけ早く帰ってきますわね」

「まだ赤ん坊のギルから離すとは見ておれ、しかと鬱憤晴らしてこようぞ」

母親は寂し気に、父親は不敵に笑って出て行った。

メイドさんに頭を撫でられながら、父親の不敵すぎる笑顔を思い出す。中々に壮絶な笑顔だった。父親にはあまり逆らわないでおう……。

この世界に産まれてきてから1年と4ヶ月弱だった。

まだまだ手が離せない赤ん坊時期なので部屋の隅にはメイドさん達が控えている。下手なことは出来ないで、いつもの寝たふりをして思考にふけるしかない。ふけている間に本当に寝てしまうことも多いのだが。

父親の笑顔の次に考えているのは、先日発覚した魔術についてだ。地球人なら魔法を使ってみたいと思うのは仕方がないだろう。

額に稲妻形の傷痕がある某魔法使いみたいに大人が杖を振るう姿は一度も見たことがない。

ということは……

どういうことだ？

ゲームみたいに呪文一つでいけるのだろうか。

（もつと小説とか読んでおくべきだったなあ）

友人が読み耽っていたライトノベルを思い浮かべる。異世界に行くとは知っていたなら頭を柔らかくするために読んでおいたのに。

とりあえず好奇心に負けて、手を横に付きだし、風よ〜とか念じてみた。

結果、ドカンツと大音量が響き部屋の壁が大破した。

「ギルフォード様！」

手を付き出し埃が舞う中、絶句していたらすぐに抱き上げられ反対の壁まで避難。

「襲撃！？」

「誰か、衛兵を呼んで！」

「くそ、ギルフォード様が留守の時に！」

突然の大破に攻撃されたのだと勘違いしたメイドや駆けつけてき

た執事、何故かコック長までもが殺気立つ。

包丁持って警戒していたコック長が後から駆けつけてきた門番にやれ、なにをしていた。

不審者はいなかったのかと怒鳴り付けている。

——いや、多分犯人私です。

別室に移動されながら、しばらく魔法は禁止にしなくてはと固く誓ったギルフォードだった。

幼少編 3（前書き）

人が多いって書くの大変。解りづらかったらすみませんm（――）m
プロローグの鈴菜と性格や口調が変わってきているのは、ギルフォ
ードとして生きてく事にしたからと天使のせいでひねくれたからで
す。

幼少編 3

「あいにく当主が不在ですが、緊急時につきアルフォンス家会議を始めたいと思います。今題はギルフォード様についてです」

自室爆発事件から1日たった。現在ギルフォードは初め入る部屋で大量の大人達に囲まれている。

予定されていた人数が揃ったのだらう、卓を挟んだ目の前で白髪混じりのおじさんがメガネを押し上げ開催宣言をした。執事長メリヤスだ。あまり普段見かけることは無いが、当主不在の屋敷の切り盛りに毎日忙しらしい。メガネの奥にクマ発見。御愁傷様です。

「——皆が知つての通り昨日ギルフォード様の魔力が暴走した。当主には伝令の早馬を出したが、早くて到着まで2週間はかかる。魔力など直ぐにでも何とかしなくてはならない。往復の日数を考えれば私達で至急対処しなくては危険であらう」

執事長が開催宣言の後も重々しく、話し出す。

執事長の右にメイド長、左にナイフ振り回していた姿が記憶に新しいコック長。コック長の隣のメイドさんは書記係なのか紙の上で筆記具をしきりに動かしている。他にもメイドさんや執事さん、門番にコック、果ては庭師さんまでもが参加しているので円卓に並んだ20人分の椅子は埋まりきり、壁際にずらっと並んでいる状態だ。

全員が知った顔の中、一人だけ知らない顔が混じっている。

壁際、入り口の扉前に立つ10代後半の細身の男だ。入るなり勧められた円卓内の椅子を断り腕を組み閉じられた扉にもたれ掛かつ

た。門番に似た軍服のような服を着て、短く刈り上げてはいるが髪が赤い。

この世界の人間は金髪や茶髪に似た色が多いので赤は始めてみる色だ。門番より男の服の方が金の刺繍など幾分派手さがあり、腰には長剣を射している。じっと見つめていたら視線が合いニヤリと笑われた。

なんとなく関わり合いたくない男だ。

かくゆうギルフォードはメイドさんの膝の上にいた。丁度執事長の目の前で、部屋の一番奥にあたる位置で皆を見渡せる。

そもそも何故こんな会議をしているかというところ、アルフォンス家は代々メイドや執事など屋敷内で働く人達に起こった問題を全員で意見を出しあい当主もまじり一致団結して解決してきたらしい。今回は当主不在の中、最善策を探すため緊急にギルフォードについて話し合いをすることになったとか。

メイド長が手を挙げ、執事長の了解を得て口を開いた。

「魔力とは早くても5歳から貯まっていくなので、1歳児では無いに等しいはず。本当にあの爆発は魔力暴走事態によるものなのではないか」

「確かに、その通りですね。疑問に思われるのも仕方ない……」

執事長が頷き答える。

「……しかし部屋の壁は内から外に壊されている。爆発前に壁に向かって腕を伸ばすギルフォード様をメイドの1人が目撃、さらに魔術が使われた形跡も部屋にあった。国家魔術師殿に来ていただき確

認したのだから確かなことだ。ですよね？魔術師殿」

執事長の視線の先は扉にもたれ掛かる赤髪男。国家魔術師とは国家お抱えの魔術師という所だろうか。

「ああ、壁にも部屋にも満ちてたぜえ、上質な魔力がな」

「しかし、ギルフォード様とは限りません！やはり何者かに狙われたのでは」

メイドさんの一人が声を張り上げると周りもそうだと賛同しでした。もしか暗殺？と物騒な声も聞こえる。

（ただの興味本意がどんどん大事になっていく……）

どんな罠だ、このやろう。

普通ではない全ては天使の融通だとしたら全てが方をつくのだが、説明をするわけにもいかない。

心底思うが、普通に転生したかった。いらぬお節介が多すぎるのだ。出る杭は打たれるという諺を是非教えてやりたい。耳を引っ張りながら教えてやりたい。頬を引っ張り上げながら教えてやりたい！

と、現実逃避をしていたら、赤髪男が見つめてくる視線がかなり痛いことに気付いた。何が楽しいのかニヤニヤとずっとギルフォードを見ているのだ。大丈夫だろうか、この男。せつかくかつこいい顔をしているのに残念過ぎる。

目が合うといっそうニヤーと笑いを開いた。

「とりあえず黙って聞けや、おまえら。100%犯人はその坊主に間違いない。インギール神に誓ってもいいね」

ギルフォードをあごで指しつつの発言に、魔術師が潜んでいたかもしれないと論議していた面目が押し黙った。

半数ほどが赤髪男が坊主と行った途端眉を潜め、半数が純粹に驚き困惑している。

「部屋に残っていた残留魔力と今こいつからびしびしと感じる魔力が一緒だ。知つての通り魔力は種類と質と量があつてなあ、人それぞれ違うわけだが……」

かつかつとブーツを響かせ赤髪男がすぐ横まで来た。自然と目が合う。

「こいつ、本当に人間かあ？　竜族や魔族とか言われた方がしつくりくるぜ」

（うっわあ）

やはり魔力量などが普通ではないのだろう。思わず目をそらす。

「まず種類だが、感じたことねえ魔術の波動だ。光属性が強い気もするが何とも言えないな。それだけじゃない、質と量もおかしい。身体に収まりきらないのか、魔力が圧縮されているイメージだな。見るやつが見たら目を疑うだろうよ」

口は笑ったままどこか眩しそうに目を細める赤髪の魔術師。
誰かがごくりと喉を鳴らした。

「早く制御してやるのが一番だと思うぜ。パンクしたらどうなるか、誰にも解らねえ」

くしゃと頭を撫でられた。今ダメになったら楽しくねえしなと小声で呟く。バツチリ聞こえてますから、お兄さん。

「し、しかし魔力制御アイテムをこんな子供に付けるなんて……！」

若いメイドさんが悲鳴混じりに呟くと、年長のメイドさんも頷いた。

「そうですね。普通魔力が高い子供は5歳から魔力を作りだし、10歳で最高値に行きあとは上昇するとしても緩やかになるとか。その間に暴走しないよう魔力制御アイテムを付けて基礎を勉強し12歳15歳程で取り外すと聞きます。魔力制御アイテムの身体への影響率はその年頃を元に作られたもの。ギルフォード様が付けられてもし異常が起きたら大変です」

「坊主の魔力を暴走させたら影響所の話じゃねえよ。仲良く死にたいならご自由にどうぞ」

赤髪男が鼻で笑い、踵を返し扉へと戻って行く。

「そんな知的な目を持った幼児見たことねえしな、何だか俺たちの話しも理解しているみたいじゃねえか。規格外幼児なら大丈夫なんじゃないか？ 長居しすぎたからな、俺はもう軍に帰らせてもらう。あ、そうそう坊主」

ふいに扉を開く手を止め振り返った。ギルフォードは条件反射でギクツと肩を揺らす。

慌てて何も解っていない無邪気な顔を取り繕ったが笑われただけだった。

「将来国家魔術師になるなら貴族ばかりのひよっこ1番隊じゃなくて、俺たちの荒くれ実力派の4番隊へ入隊することをオススメするぜ。お前ならいつでも歓迎だ」

その頃には俺は部隊長とかしてるかもな」と陽気に笑って扉を閉め赤髪男は去っていった。

国家魔術師4番隊には赤い毛質の見通す力を持った怖いチエシヤ猫がいる。

側にいたらどんどん暴かれるに違いない。

絶対4番隊だけには入らないよう、覚えておこう。

幼少編 3（後書き）

チエシヤ猫さんの名前はず。次こそ出たらいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1533y/>

安心王道転生記(仮)

2011年11月10日02時15分発行